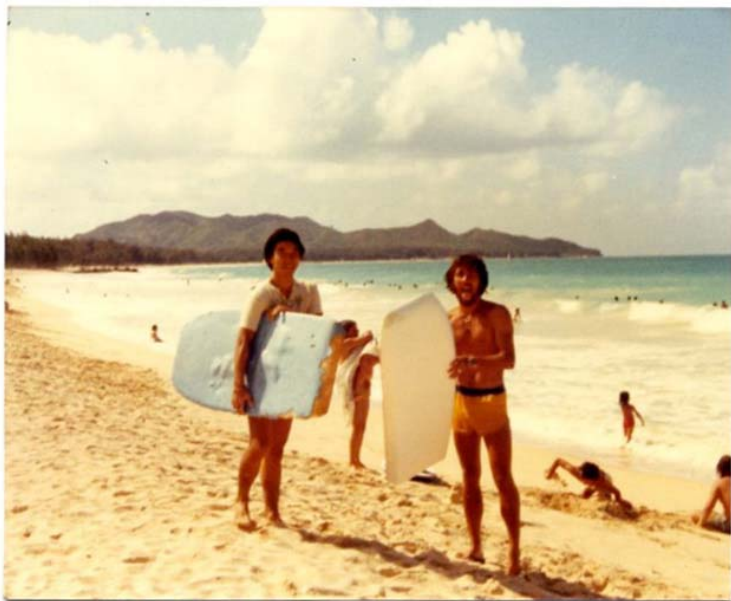


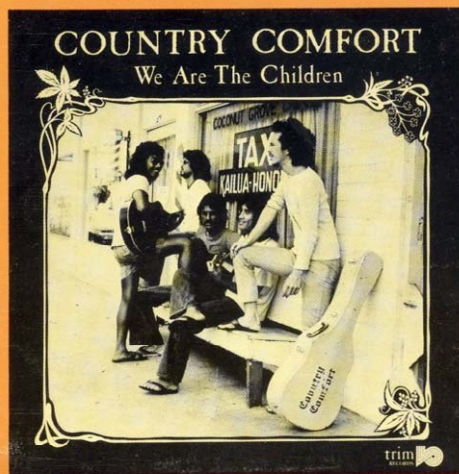
Music

カントリー・コンフォートのワイマナロ・ブルーズ

Text & Photos: George Cockle
文・写真/ジョージ・カックル



Classic Collector Series - Vol. 1



Cord International

innova records

1978年に日本からハワイへ引っ越し、サーフィンしながら仕事を始めた。ハワイに着いてから、韓国のアメリカンスクールで知り合った友達のジェームズの家で居候をさせてもらい、ベディキャップを仕事にしながら、島のさまざまな場所に連れていってもらった。彼はサーフィンをしなかったので、ボディボードやキャンプによく行った。そんなある日、長く白い砂浜がクレセントのように続く海岸を訪れた。名前はワイマナロビーチ。観光客はほとんどいなくて、ローカルばかり。売店もないし、自動販売機ももちろんない。海岸のそばの村もローカルオンリーで高層ビルも一つもない。ワイキキから車で1時間もかからないのに、驚くほど静かで、マジカルな海岸があるのは不思議だった。波も立たないので、サーフィンができない。ショアブレイクで遊ぶ海岸だ。そして、俺が一番不思議だと思ったのは、パームツリーが1本もないこと。当時はそんな光景を見たこともなかった。松みたいな大きな木が海岸沿いに並んでいた。

俺たちはそのキャンプ場にテントを張って泊まった。そばにはテントがもうひとつ。そこにはハワイアン若いの男が4、5人いた。

その晩、隣のテントから聞こえてくる声が、遅くなればなるほど大きくなった。そして夜中の12時ぐらいになると、酔っばらったハワイアンの声が出た。「あのハオリをぶっとばそうか?」。誰のことなのかと思っていたら、俺の友達が笑い始めた。「お前のことだよ!」。ハオリとはハワイ語で白人のことだと、その時はじめて知った。でも俺はハッパなのになと思った。ハッパはハーフのことだ。最終的に誰も来なかったけど、あまり眠れない夜になってしまった。誰もいない海岸だし、ちょっと怖かったんだ。俺の友達はいびきをかいて寝てたけどね。次の朝、テントからでたら、隣のテントの若者達と顔があった。「ヘイマン、グッドモーニング!」。そう言い放った彼らは、想像とはかけ離れたフレンドリーなムードで、俺たちはいろんなことを話した。

それからだいぶ経ったある日のこと、ローカルラジオを聴いていたら、ハワイで1975年にデビューしたバンド、カントリー・コンフォートの曲ばかりかかる日があった。よく聞いていると、そのメンバーのビリー・カウイが亡くなったという。DJはワイマナロの海岸のことを話し、バンドのヒット曲である「ワイマナロ・ブル

ーズ」をヘビーローテーションした。俺がキャンプしたあのすばらしい、マジカルな海岸のそばの街を歌った曲。詩には、ハワイアンは大切なものをなくしてしまっている、海岸を売ってホテルを次々に建ててしまっている。島は小さいので行くところがないと……。ハワイアンのプライドを蘇らせた曲の一つでもある。それまで俺はこのバンドを知らなかったが、すぐにレコード屋に行って手に入れた。シシリオ・アンド・カポノやカラパナもいいけど、もしこのバンドのことを知らないなら、一度聞いてみてもらいたい。70年代のハワイのバンドのなかでも、彼らは一番メロウだ。スラックキーギターがたっぷり入っているハワイアンロック。今はもう生では聴けないが、彼らのハワイアンスピリットは感じとれるだろう。「ワイマナロ・ブルーズ」に込められたスピリットは、今も昔のままの姿で美しく佇むワイマナロのビーチに息づいている。



ジョージ・カックル ●60~70年代のロックに精通し、ラジオ・パーソナリティとしてインターFMや東京FMで活躍中。鎌倉出身・在住。波乗り歴38年の親父サーファー。

www.whatsupmusicinc.com